

井伊直虎ゆかりの地!! 館山寺と村櫛と井伊家

姫街道

発行:平成28年4月20日
 姫街道未来塾 瓦版
 号外 館山寺温泉観光協会
 発行人 上嶋裕志

●井伊家のはじまりは庄内半島か?!

浜名湖の東、村櫛に志津城址がある。千年にもわたる時を経て井伊家との物語があらためて見直されている。

井伊家の祖、共保の出生のなぞに諸説ある。志津城の藤原共資の子として村櫛で生まれた。井伊谷で生まれた。井伊谷の井戸の中で生まれた。井伊谷で生まれ後に共資の養子になった。などである。共保は共資の実子か養子か。どこで生まれたか分かれる点であるが「引佐町物語」記述が妥当ではないかと言われている。

井の国千年物語では龍潭寺の近くの御手洗の井戸で生まれて間もない男の子が、元旦に捨てられていたとある。



志津古城記念碑

●捨て子は丈夫に育つ

当時、共資には世襲とすべき男子がなかった。これまで男子が生まれても、なぜか育たなかった。そのうちに幸運にも、また男子が生まれた。共資は「捨て子をして、それを拾いあげて育てると丈夫に育つ」という風潮を聞いていて、寛弘7年(1010)元日の早朝、日頃信仰している井伊谷の地藏寺(龍潭寺)に出かけ、近くにある井戸の傍らに置き捨て、僧が井戸へ身を清めに来るのを待った。やがて僧が来て子供を拾い上げて去った。物陰で無事に拾われたのを確かめて村櫛に帰った。しかし後日、自分の子であることの証を残しておかねばと思い、再び井伊谷に出かけ、井戸の傍らに藤原家の紋章である櫛の木を植えて帰った。

●庄内半島の村櫛にある志津城

正暦4年(993)に藤原鎌足より12代の孫、藤原共資(ともすけ)が勅を奉じて遠江国に下り、村櫛に志津城(館)を築いて住んだといわれている。

藤原共資は、はじめ遠江国内の巡検を使命として来たのであるが、その後次第に重く用いられ、



志津城址の近くにある法雲寺観音堂

●今、堀江城は浜名湖・パール

国政に参与されて遠江の国司となった。何代目かは不明。当時国司が政治を行う場所は磐田郡見付にあったが、共資は見付には住まず、海に面した風光明媚な村櫛を生活の場所として志津城に住み、静かに余生を送り、長元8年(1035)75歳で亡くなり、背後の丘の上に葬られたという。



藤原共資公記念碑

月日は流れ、子供は成長してやがて7歳になった。そこで共資は地藏寺に向いて住職に会い、事情を詳しく話して厚く礼を述べ、子供を連れて村櫛へ帰った。共資は子の名を共保と名づけた。共保は聡明な子として、立派に成長し、万寿1年(1020)一五歳で元服した。壮年となるに及んで技量人を越え、武勇も世の常でなく、恩威並び備わって郷人は、みな敬服した。父の官をついで備中守となり、遠江全般の政治を行った。けれども共保は、幼い頃育った井伊谷が忘れられず、井伊谷へ移って住みたいと願い、共資もその思いが強いを知ってこれを許した。共保は城を築いて井伊谷に移った。

共保は、地名にちなんで、姓を井伊と改めた。これが井伊氏の祖で、以後、源平時代から戦国争乱の世を経て、徳川末期まで二四代八百余年も活躍を続けたのである。その中に途切れそうになった井伊家を守った「女城主井伊直虎」の物語がある。



共保が捨てられた御手洗の井戸



御陣山にあった堀江陣屋のところです

庄内には志津城・佐田城・堀江城があったという。堀江城は浜名湖の重要な海上舟運の役目を担っていたと思われる。幕末まで残った堀江城の城主大沢氏の菩提寺は県指定の民俗芸能「呉松の大念仏」で有名な庄内町の宿蔵寺にある。

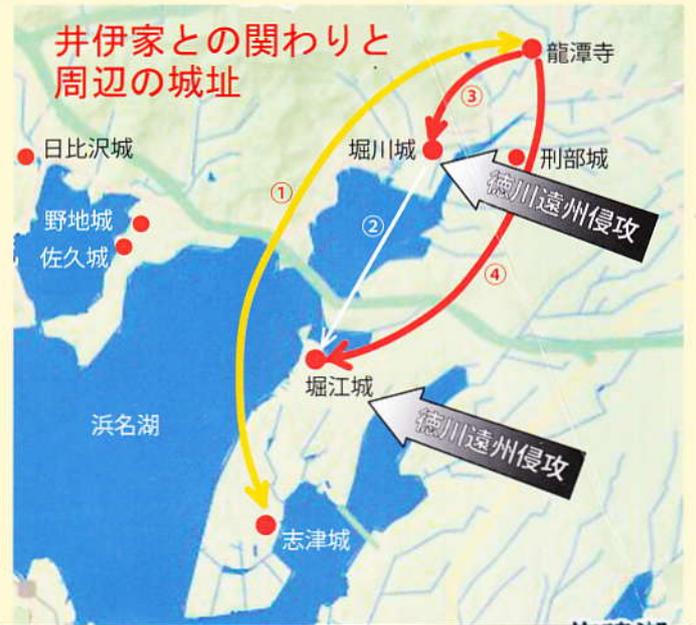
直虎も来て法要を営んだ堀江城（館山寺）



浜松市北区役所の西に堀江城址がある

堀江城の配下にあつたという気賀村の堀江城は先に攻められ、多くの住民を犠牲にして落城し、悲惨な物語が伝えられている。
堀江城は善戦したが、堀川城が落城したことを知り大沢氏は和睦に応じた。その後、家康の家臣になり幕末まで堀江の地を治めた。

堀川・堀江城戦記
永禄11年（1568）末に徳川家康が三河より引佐町陣座峠を越えて遠州入りをした。道案内に今川氏真から徳川方へ離反したこの地に詳しい三人衆を取り込んだ。家康は浜名湖周辺の今川に忠誠している城を三人衆の案内で刑部城をはじめとして、日比沢城、佐久城、堀江城、堀江城と次々に攻略した。



- ①井伊家の租、共保のつながり、井伊家の始まり
- ②堀川城の戦いと堀江の十頭の物語
- ③堀川城の戦没者の弔いに井伊家より直虎が?!
- ④堀江城の戦没者の弔いに井伊家より直虎が?!

尾藤主膳が堀江城で死んだことは尾藤家の過去帳よって知られる。龍潭寺の和尚は葬儀の導師として堀江に向かったという。十二日と上にあるのは堀江城主大沢基胤が家康に降参した日で、この日に堀江で死者の葬儀を行ったこと十二日となったと推定できる。この日の葬儀に南溪和尚と付き添いで次郎法師（直虎）が来たと言われている。



十頭八幡複製（館山寺美術博物館）

南溪和尚の自筆のものと思われる龍潭寺過去帳妙録に「十二日 永禄十二年三月二十七日 元海宗真居士 堀川大将 尾藤主膳正」とある。

堀江（館山寺）に十頭（とうず）という地名と十頭八幡宮が個人の家の片隅にある。地元の人が大切に祀っている。

堀川城の戦い

気賀にある堀川城は永禄十二年三月二十七日に徳川家康によって突如攻撃された。堀川城は民百姓が集まった砦のような物だったと思われる。都田川の葦の中に作られ、満潮時には船で行き来していたと思われる。家康もこの場所は戸惑ったようである。その堀川城の戦いは九一日かかったといわれている。この戦いで千人が亡くなり七百人が捕虜となった。のちに獄門囃といわれる呉石で処刑されている。

十頭八幡宮の由来 武将尾藤主膳の最後

戦いに敗れた城主山村修理は姫街道沿いの小高い丘で堀川城が落城するのを目の当たりにして切腹している。戦いには寺の和尚も参戦していて落城後、葬儀をする和尚も居ず井伊家から南溪和尚と次郎法師（直虎）が来て法要したという。

尾藤主膳は小船で家来十人あまりを連れて堀江城に向かっている。助けを求めに行つたのか落城を知らせるために行つたのかはさだかではないが、堀江城の門は閉ざされ

堀江城（陣屋）と大沢氏

堀江城の戦いで徳川家と和睦して当地を治めることとなった。第9代当主である大沢基胤は、大規模な堀江城の改築を行い、御陣山にその中心を据えたものと考えられる。おそらく大沢氏は、浜名湖における湖上運輸に着目し、湖上をよりいっそう眺望できる御陣山に居館を移したのではなからうか。そして、江戸初期には同地に幕府旗本として居館を整備した。これが堀江陣屋である。これ以後、大沢氏は幕末に至るまで拠点を堀江の地から動かすことはなく、以後二百数十年の長きにわたり当地が文字通り旗本大沢家領の中心地となったわけである。



堀江城 奥御殿鬼瓦 弘化三年



明治維新のころ堀江陣屋の建物（当時「御殿」と呼称されていた）は、版籍奉還の際には藩邸として、廃藩置県の際にも堀江県庁として活用されてきた。堀江県が浜松県に合併されると、御殿は不要となった。

あとがき

浜名湖は地震により海洋と繋がってから数々の物語が残っている。地震で新居（橋本）が壊滅的な被害にあつて残った村人は庄内半島に集団避難したという。村ごと引越した場所が村越（村越）と言われたという伝説がある。その地に井伊氏の祖、共保の生まれた志津城の伝説を紹介できるのも「女城主井伊直虎」のおかげである。 記HK